

## 読書のススメ

校長 関根 正弘

一昨年、昨年と「図書館報 天馬」のシリーズ随想を書く機会をいただき、稚拙ながら原稿を書いてきた。その中で、自分の趣味や経験をたどりながら、多くの本のタイトルと著者を紹介してきた。さて、そろそろネタが尽きてきた、今年は何を書こうか。こんなことならもっと小出しにしてくれば良かったと反省しながら原稿用紙に向かっている自分がいる。この原稿を書いている今も、コロナ禍は第8波を迎え感染拡大が続いている。テレビでは医療逼迫の現状が伝えられ、医療現場は私たちの想像を超えて大変なのだなどつくづく思う。

私は幼少期にアレルギーと自家中毒のため、小学校3年生になるまでは一年の多くの日数を入院して病院で過ごすことが多かった。そのためかわからないが医療に関する映画やドラマ、漫画や小説を好んで見たり読んだりする傾向がある。真っ先に思い出すドラマは「白い巨塔」である。唐沢寿明さんや岡田准一さんのそれではありません。田宮二郎さんが主演のものです。「パッチ・アダムス」や「Dr. コトー診療所」、「ブラックジャック」や「JIN～仁～」、「コードブルー・ドクターヘリ救急救命」や「PICU 小児集中治療室」等々、挙げるときりがなく出てくる。そして最近、新テレビドラマのタイトルで「大病院占拠」なるものを見つけた。その内容は、日本が誇る大病院を鬼のお面をつけた武装集団が占拠する・・・という、これまでの医療系のドラマとは少し違うが、主演が櫻井翔さんであることから毎週観ることになった。

皆さんの中には、夏川草介さんが書いた「神様のカルテ」という小説を知っている人も多いと思う。その当時、私の妻が嵐のファンで、私は女優としての宮崎あおいさんのファンだった。その櫻井さんが主演を務め、宮崎さんがその妻を演じる映画「神様のカルテ」が公開され、二人で観に行ったのを覚えている。この物語を簡単に紹介すると、主人公の若手医師である栗原一止（くりはらいちと）が、病院で出会う患者さんや先輩医師、同僚の医師や看護師、大学同期の親友、アパートの変わった住民達や主人公を優しく見守る写真家の妻など、多くの人と接しながら自分の生き方を考えていく姿を描いたものだ。この物語の中に、彼が担当する余命幾ばくもない患者さんとの対話がある。この患者さんは高校の国語教師で、たくさんの本に囲まれた自身の部屋で栗原とこんな会話をする。

患者 『ヒトは、一生のうちで一個の人生しかいきられない。しかし本は、また別の人生があることを我々に教えてくれる。たくさんの小説を読めば、たくさんの人生を体験できる。そうするとたくさんの人の気持ちもわかるようになる。』

一止 『たくさんの人の気持ち？』

患者 『困っている人の話、怒っている人の話、悲しんでいる人の話、喜んでいる人の話、そういう話をいっぱい読む。すると、少しずつだが、そういう人々の気持ちがわかるようになる。』

一止 『わかると良いことがあるのですか。』

患者 『優しい人間になれる。』

一止 『しかし今の世の中、優しいことが良いことばかりではないように思います。』

患者 『それは、優しさということと、弱いということを混同しているからです。優しさは弱さではない。相手が何を考えているのか、考える力を「優しさ」というのです。優しさというのはね、想像力のことですよ。』

すごく良い表現だと思った。自分には思いつかないような表現で、心にストンと落ちてきて納得してしまうような文章だと思った。

本を読んでいると、こんな表現の仕方があるのだと、感心してしまう表現に出くわすことが多くある。こういった表現の仕方や語彙を身につける上でも、言葉を操る専門家の書いた文章に触れることは大切です。ですから、皆さんにもたくさんの本を読むことを勧めます。これが私の「読書のススメ」です。読書を通して、いろいろな生き方やいろいろな人生を知り、相手の気持ちのわかる優しい人間になってください。